

津雲貝塚出土とされる弥生土器から派生する問題

伊藤 淳史

1 はじめに

岡山県笠岡市所在の津雲貝塚は、多数の人骨が出土している縄文時代貝塚として学史的にひろく認識されているところである。それは全く誤りではないけれども、津雲貝塚出土とされる資料には、ごくわずかだが弥生時代以降の土器類も散見される。わたしが最初にそれに関心を寄せたのは、1988年度の学部卒業論文として、弥生時代における伊勢湾地方と西日本との交流様相を描出すべく、搬出された弥生土器資料を収集検討していた時にさかのぼる。どこで誰に教えられたのか、あるいは何を見てたどりついたのか、発見の経緯については全く記憶に残っていないのだが、『本山考古室要録』（以下『要録』とする）⁽¹⁾という書物に、伝津雲貝塚出土とされる三河地域の中期土器が報告されていることを知った。その当時でも、そして現在においても、瀬戸内地方までそのような伊勢湾地方の資料が移動することは異例である。結局のところ、出土の経緯が不明なこともあり、その資料は搬出例としてとりあげることなく放置していたのであった。

ところが、近年になって、ほかにも同種の土器——三河地域や近畿地方の中期弥生土器に比定できそうなもの——が津雲貝塚の資料として報告されていることに気づいた。それは、笠岡市教育委員会が刊行した総括報告書で（以下『総括報告』とする）⁽²⁾、市主体の発掘百周年記念事業として、国史跡津雲貝塚整備にともなう範囲確認調査や過去の出土資料再整理を実施した成果などを収めたものである。複数例となると、単に怪しい事例として片付けるわけにいかない。いま一度、さきの事例とあわせた検証と評価を試みる必要があるのではないか、と思うに至り、拙論を起稿することとした。

2 当該の資料について

(1)『要録』掲載の資料（図23・24）

関西大学考古学博物館の前身である本山コレクションに含まれていたもの、ということになる。大阪毎日新聞社社主であった本山彦一（1853～1932）と当時の考古学界とのかわりについてや、彼のコレクション資料の意義については、関西大学関係の諸文献をはじめいくつも詳述されており、ここでは省略する⁽³⁾。残念ながら、管見の限りでそれらから、

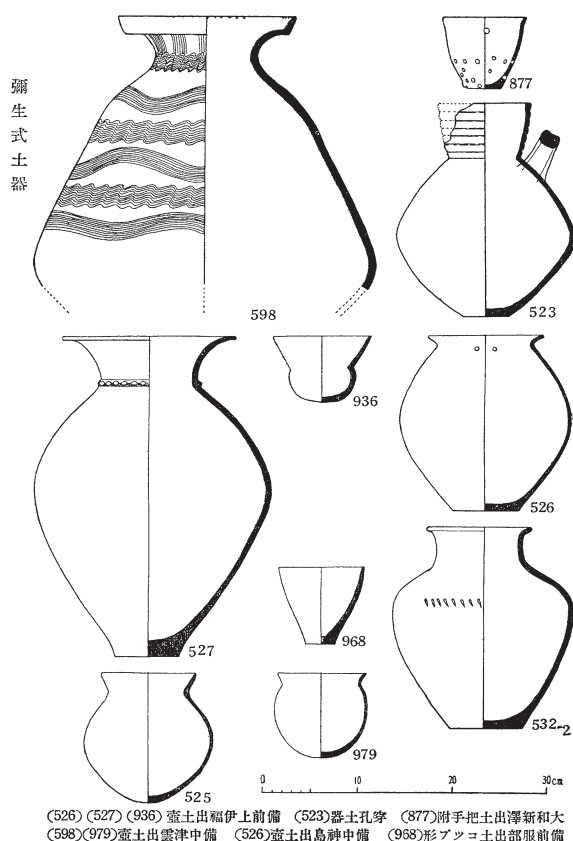


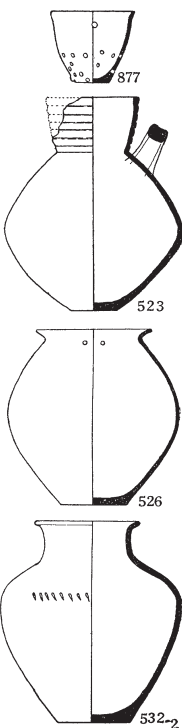
図23 『本山考古室要録』における関連挿図と記述 注(1) 文献より縮小転載

この資料がなぜこのコレクションに含まれるに至ったかを知る手がかりは得られなかった。そして、関西大学所蔵本山コレクションの津雲貝塚資料は、『総括報告』では大串菊太郎調査出土品が主体とされており⁽⁴⁾、また、縄文時代貝塚関連資料については検証が進められているようであるものの⁽⁵⁾、この資料の来歴に触れるものではない。

まず、『要録』の記述も含めて転載する(図23-598)⁽⁶⁾。底部を欠いた残存率五分の二程度の大型壺であること、色調や文様についての記載とともに、「この土器は津雲出土となっているが疑いを持つ人もある」と結ばれる。『要録』の刊行は1935年、本山の依頼で濱田耕作が末永雅雄を派遣し、小林行雄が実測図作成などに従事したとされる⁽⁷⁾。小林らが弥生式土器の全国的集成と編年に邁進していた段階ではあるけれども、津雲貝塚より出土する弥生土器として不自然であることをすでに指摘している点は、慧眼と評価できるだろう。

第三〇圖 彌生式土器。(五三三)(五二六)(五九八)(八七七)

1 備中國淺口郡大島村津雲貝塚出土(五九八)。此の遺跡は瀬戸内海に面した遺跡として最も有名且つ重要な場所であつて縄紋式土器と共に彌生式土器が他の石器時代の遺物や人骨と共に發見せられこの土器も亦その内の一つであるとしてゐる。現在約五分二だけを残り胴の一半底部を缺損してゐるが稍うす黒い赤褐色を帯びた地に荒い櫛の様なもので細かい複線波文帯と大きく彎つた條帶文を交互に表してゐる。口徑四寸一分現在高さ九寸一分。この土器は津雲出土となつてゐるが疑を持つ人もある。



598

523

936

526

527

968

979

532-2

0 10 20 30cm

(526)(527)(936) 壺出土福伊上前備 (523) 器土孔穿 (877) 附手把出土澤新和大
(598)(979) 壺出土雲津中備 (526) 壺出土島神中備 (968) 形アツコ出土部服前備

図版第35 『本山考古室要録』p. 222 に「この土器は津雲(註岡・山県)出土となっているが疑をもつ人もある。」の記載通り、器高 39.5cm の土器で受口の大きく開いた口縁部をもつこと、この口縁部に 8 個 1 組の局部瓦痕列があること、胴部の重心が下方にあること、この壺は頸部にも縦位の櫛描直線文をもつが、櫛描きの波長の長い波状文と長い連弧文のような横線文を交互に組み合わせた特徴的な装飾法をもつことなどから、瀬戸内地方出土の土器ではない。出土地は明らかではないが、中期の瓜郷式の影響下に生じた獅子懸式・古井式・下長山式と呼ばれる知多半島から豊川流域にかけて存在する地域的な土器様式の一つに含まれる。この時期は、『弥生時代』(前出)の東海地方の記述において久永春男氏が述べる中期の弥生式文化普及期にあたり、畿内地方とは独立した土器形式が創造された後でさらに各小地域毎に特色をつくりだした時期である。畿内地方での中期第Ⅳ様式、また、『弥生式土器集成・本編 2』(前出)東海地方 1 の紅村弘氏の記述における中期第Ⅲ様式期にあたる。(井藤 徹) *598



35 壺形土器
A Yayoi Earthen Vessel

図24 『考古学資料図鑑』における写真と記述 注(8) 文献より縮小転載

その後1973年には、関西大学文学部より刊行された図録においても写真が紹介されている(図24)⁽⁸⁾。より詳しく特徴が記載されたうえで、「瀬戸内地方出土の土器ではない」と明言し、「出土地は明らかではないが、中期の瓜郷式の影響下に生じた獅子懸式・古井式・下長山式と呼ばれる知多半島から豊川流域にかけて存在する地域的な土器様式の一つに含まれる」として、想定される故地についても踏み込んだ評価を下している。これは、その後引き続き記述されるように、河出書房の『日本の考古学』弥生時代編における東海地方の編年を参照にしたものであり⁽⁹⁾、畿内中期第Ⅳ様式相当という並行関係の指摘とあわせて、おおむね正鵠を得たものといえるだろう。このあたりについては次節でも再論

する。

この資料がとりあげられている文献は以上2件しか把握していない。なお私自身は、関西大学博物館の常設展示で展示中の実資料をケース越しに実見した（2023年5月16日）。手に取っての熟覧ではないので、内面などの観察はない。そこでは、「壺形土器／岡山県笠岡市西大島津雲貝塚 弥生時代中期」のキャプションプレートが付されていた。

(2)『総括報告』掲載の資料（図25）

笠岡市主体の発掘100周年記念事業の成果報告であるこの『総括報告』には、範囲確認のための最近の調査成果とともに、大正時代に複数実施されて各所に分散している資料の実態把握や再整理の報告も収められている。京都大学には、大正8年（1919）に長谷部言人・清野謙次が別個に行った発掘資料が所蔵されているとされ、未報告分もあわせた考古資料がここで再報告されている。今回取り上げるのは、結果としてそれらに含まれていたものとなるが、いずれも私自身が実査を果たしているものではないので、公刊されている報告書掲載の挿図や写真からの所見をもとにして記述していく。

さて、上記した大正期の調査は、1920年に刊行された『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第5冊（以下『京大報告』とする）に報告されているもので⁽¹⁰⁾、そこでもわずかなのであるが弥生～古墳期の破片資料が写真で紹介されてるとともに、本文中では弥生時代層の存在や出土点数も示されている）。写真のみだった掲載遺物については『総括報告』では図化されている。それらは、津雲貝塚出土としてとりたてて違和感のないものであり、遺跡として弥生～古墳段階の活動域が存在して可能性を示す情報ととらえられる。

しかし、戦後に京都大学文学部が作成した考古学資料目録においては、「030 縄文土器破片 約500個」などとして紹介されているものの、弥生時代以降の資料に関しては全く触れられていない⁽¹¹⁾。以下に述べていくように、『総括報告』においては、大正期の『京大報告』では未報告であった弥生土器資料が複数報告されており、そこに今回問題とした土器も含まれるのだが、なぜ割愛されたのだろうか。おもに佐原眞を中心に実施されたであろう資料目録作成の作業において、目にしたとすれば資料目録で言及するのではと思うのだが、目にすることはなかったのだろうか。今となっては直接うかがうすべはなく、謎である。

話を本題に戻して、問題となる土器を取り上げよう。上記したように『総括報告』で呈示されている未報告の弥生土器資料は、京都大学総合博物館所蔵として12例（同書第46・47図の122～133／写真34）、関西大学博物館所蔵として2例（同書第62図15・16）がある。

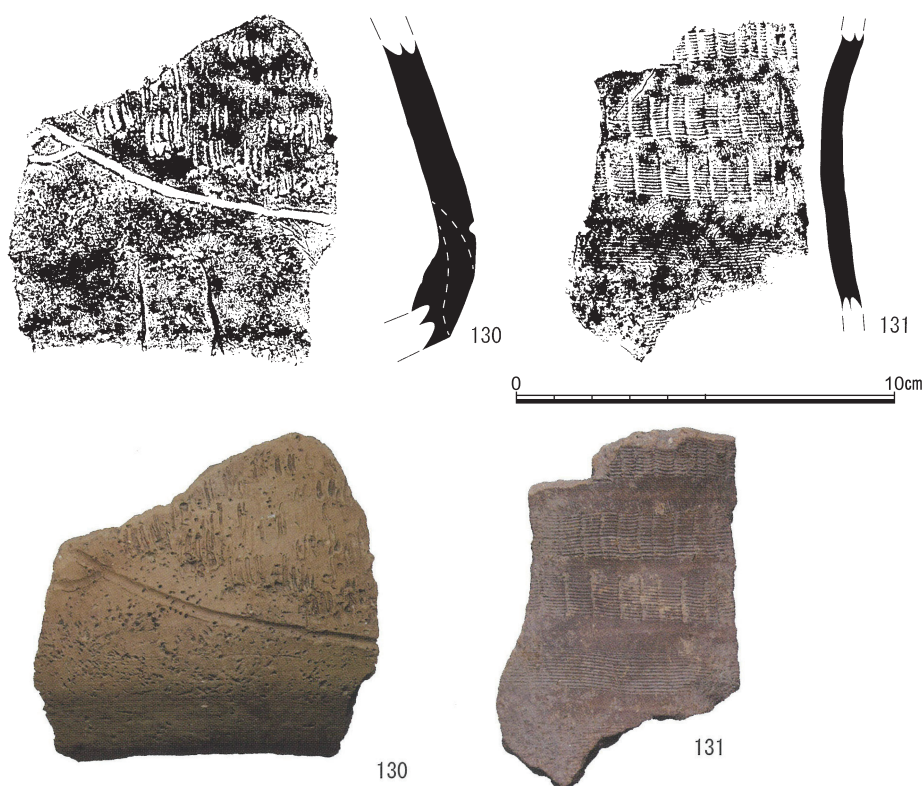


図25 『総括報告』で報告されている資料 注(2) 文献第47図および写真34より転載

残念ながら『総括報告』で示されている実測図からは、調整技法等の詳細を判別するのはむづかしいけれども、原色写真を参照することができる。それらからの判断で津雲貝塚出土として強い違和感が抱かれる資料は、前者の130と131であり、それぞれ『総括報告』掲載の挿図と写真をそのまま転載する(図25)。

130は壺の胴下半部の屈曲部とみられ、沈線で画された上側に不揃いな櫛による短いタッチの縦位線が施されているモチーフである。下側に弧線文らしきものもともなうようだが、全容はわからない。いずれにしろ山陽地方ではみられないものと思われ、伊勢湾地方東岸、三河地域の中期後葉期に顕著となる、ササラ状の櫛描文を沈線などで方形に囲む独特のモチーフを想起させる(例えば愛知県西尾市岡島遺跡例を報告書より転載する: 図26-I・J・Lなど)⁽¹²⁾。編年の位置づけについては、前述の『要録』掲載資料とあわせて次節であらためて検証する。

131は壺の頸部破片とみられ、上半に櫛描簾状文が3条、下半に直線文が2条まで確認

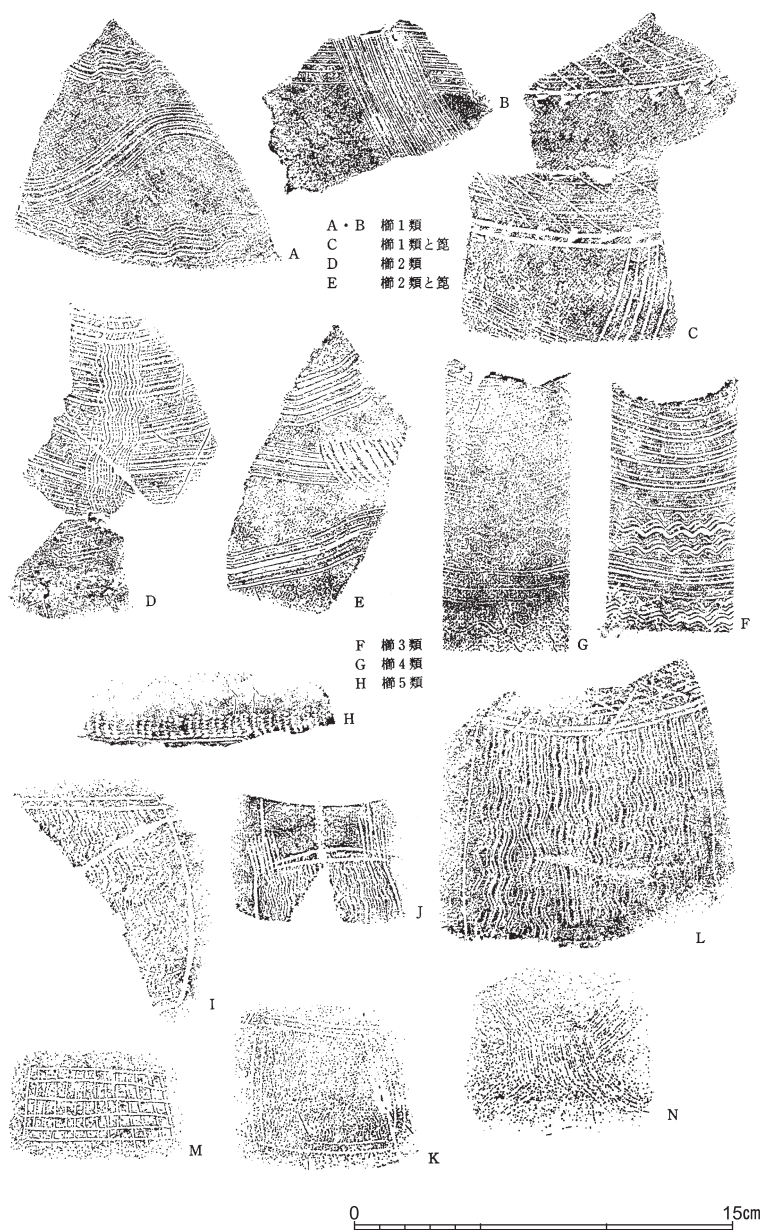


図26 岡島遺跡出土土器の文様例 注(10) 文献第37図より縮小転載

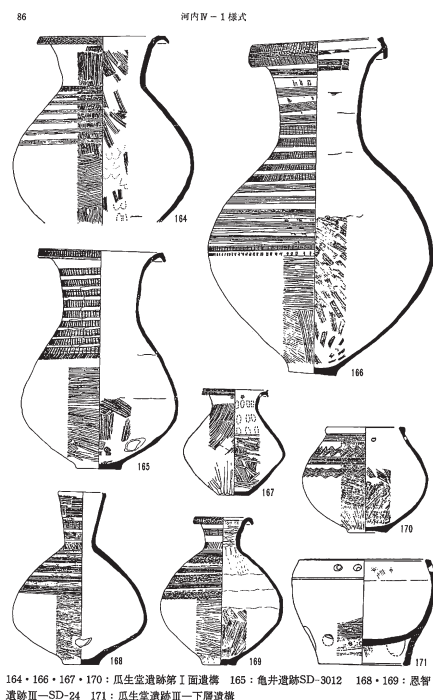


図27 『様式と編年』河内Ⅳ-1様式の例
注 (13) 文献より縮小転載

できる。また条間には幅広で暗文状の磨消線も施されている。そもそも山陽地方では中期後半にかけて櫛描文の施文が発達する傾向にはなく、このような簾状文を多段に施す資料もみられない。そうした特徴で想起されるのは、近畿地方の大阪湾南岸、河内地域の資料であり、例えば『様式と編年』河内Ⅳ-1様式における瓜生堂遺跡出土の壺形土器などが相当するのではなかろうか(図27-166)⁽¹³⁾。

3 検証と評価

前節でとりあげた資料3例のうち2例について、弥生中期後半の三河地域の特徴を示すものと考えた。とくに『要録』掲載の関西大学資料については、器形や文様の判明する大破片であり、かねてより指摘されているように三河地域の資料であることは間違いない。一方で『総括報告』の資料130は、小破片であるため確実さは劣り、あくまで私(伊藤)のみの判断にとどまる。しかし、ここではそれをふまえつつ、両者の故地における編年的位置づけを確認しておくとともに、伊勢湾地方以西における同時期の交流状況や、津雲貝塚の遺跡としてのありよう等も考慮し、搬出土器としての可能性にあらためて評価を下しておきたい。

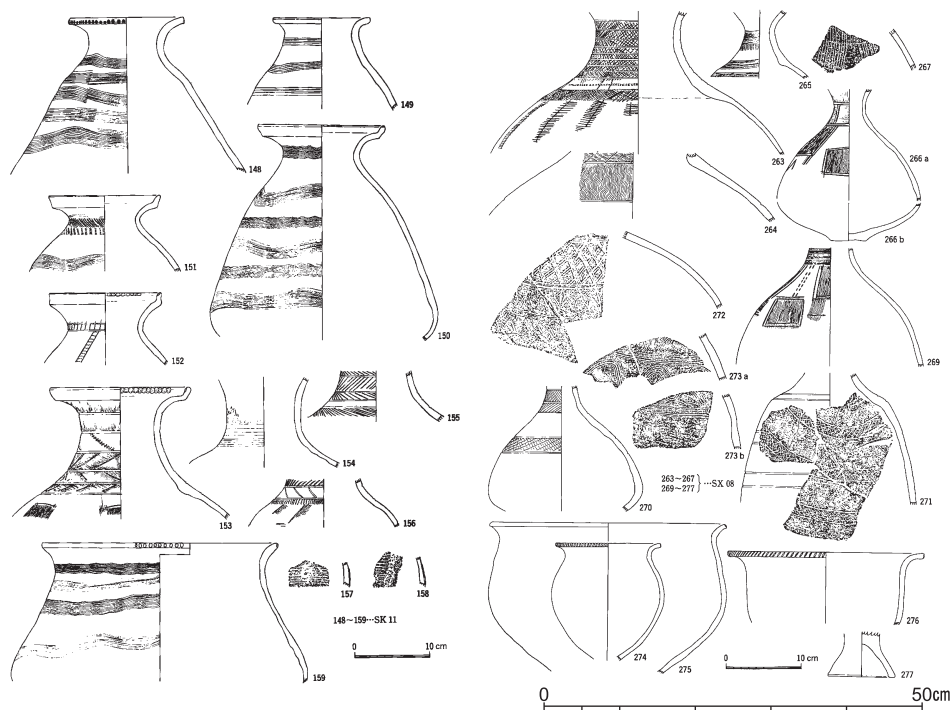


図28 岡島遺跡2次調査出土土器 SK11(左) SX08(右) 注(14)文献より縮小転載

三河地域の弥生中期後半においては、瓜郷式土器の標識遺跡である豊橋市瓜郷遺跡が古くより知られるところではあるが、1980年代後半～90年代にかけて実施された西尾市岡島遺跡で遺構単位のもった資料が確保され、体系的な編年が呈示された⁽¹⁴⁾。ここではそれに依拠する。まず『要録』掲載資料であるが、例えば器形と文様の類似したものは岡島2次SK11に見出せる(図28左)。こうした特徴は、遺跡で呈示された土器変遷ではIV-1b期に位置付けられる(図29)。次に『総括報告』の資料130のような、篋描の区画文様や特殊モチーフが多用される内容は同調査のSX08に認められ(図28右)、変遷としては後出するIV-2a期に位置付けられる。この段階では、横帯でめぐる櫛描文様が衰退してしまっている。ここでのIV期はおおむね西日本からの凹線文波及期であり、三河地域でもその系譜の土器群(図7の細頸壺G)と、ここで対象とした資料のような在地系譜の土器群とが併存する段階となる。凹線文出現以降をIV期で中期後葉とするならば、それぞれは中期後葉の前半と後半の資料、と言ってよかろう。

ところで筆者は、冒頭で触れたように、かなり以前になるが近畿地方における東方からの搬入土器を集成検討したことがある⁽¹⁵⁾。伊勢湾地方以東からの土器は、凹線文より前

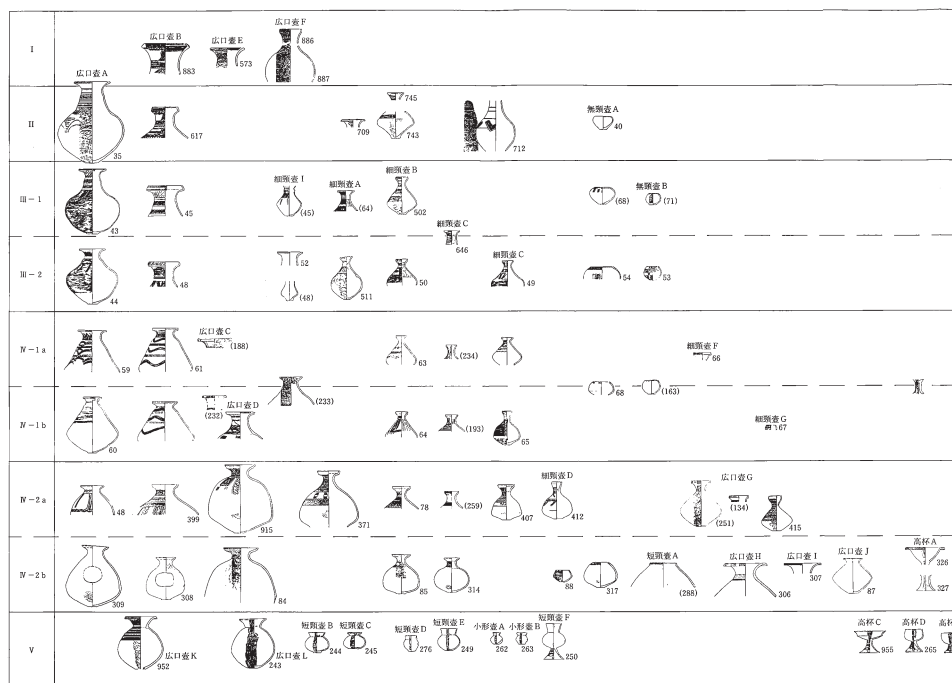


図29 岡島遺跡出土土器で呈示された変遷（一部） 注（14）文献の付図より縮小転載

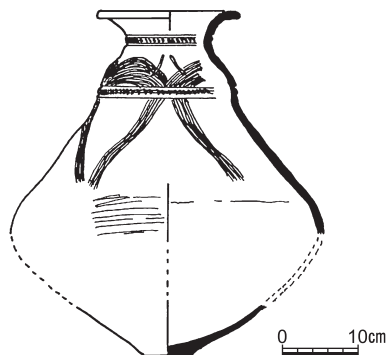


図30 恩智遺跡出土の三河地域からの搬入土器
注（16）文献の図を再トレース 縮尺1/10

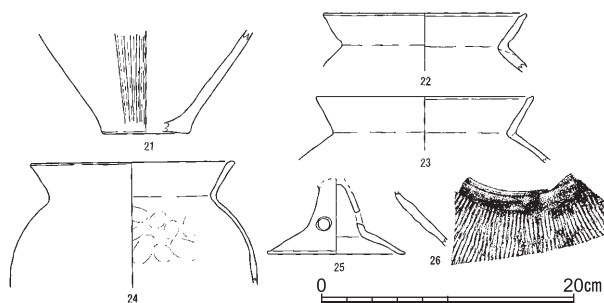


図31
津雲貝塚確認調査トレンチ
T22第10層出土土器
注（2）文献第106図を縮小転載

の中期中葉段階までは、大和盆地では散見されるが、凹線文以降は特殊な性格の円窓付土器を例外として全く認められなくなる。

三河地域からの資料という点では、八尾市恩智遺跡S D10・12出土とされる資料がかねてより知られているが（図30）⁽¹⁶⁾、特徴からみてかつての「瓜郷式」の範疇でとらえるべきものと判断され、岡島遺跡でのⅢ－2期、中期後葉までは下らない時期の搬入土器といえる。

こうした状況を考慮すると、伊勢湾地方が西の近畿地方からの影響を強く受けている中期後葉段階に、あえて三河地域のきわめて在地的な特徴をもつ土器が、近畿地方を飛び越えて津雲貝塚まで運ばれていることは、全く想像しがたい事態といえる。また、この段階の河内地域の簾状文土器についても、可能性は薄いのではと思われる。

もっとも、さきに触れたように、遺跡としての津雲貝塚は弥生時代にも存在していることは出土土器から知られる。『総括報告』に報告された確認調査トレンチT22第10層からは、弥生中期後葉とおぼしき甕形土器底部が出土しており（図31－21）、このトレンチは、関西大学資料の主体である大串菊太郎の調査区や、京大資料に含まれる長谷部言人の調査区の至近地となっている（図32）。この一帯に弥生時代の遺物包含層があり、未報告として報告されている弥生時代資料の一部はそれに由来するものの可能性はあろう。

4 小 結

結局のところ、津雲貝塚への搬入土器としては否定的見解を提出することになる。万に一つ搬入土器であったとするならば、それはそれで、極めて特異な事例として妥当な理由説明に苦慮することになる。しかし、ではなぜ、このような土器が現に存在しているのだろうか。普通に考えるならば、関大資料の場合も、京大資料の場合も、当時あるいはその後に別遺跡からの混入が生じた事態を想定することになろう。

人種論への関心から各地の貝塚が渉猟されていた当時として、このような三河地域在地の資料が出土するとすれば、現愛知県田原市所在の吉胡貝塚が候補となろう。また、河内地域の簾状文土器の存在は、大阪府藤井寺市国府遺跡の存在が想起される。もとより、これらはあくまで思い付きの域を出ておらず、当該資料の精査はもちろんのこと、当時の学史的状況や、本山彦一や研究者たちの動向を丁寧にあとづけしながら、追究しなければならないものである。それら一切は今後の課題である。

ただ、これが弥生土器資料のみにとどまるものではなく、それ以外の、主体をなす縄文

小 結

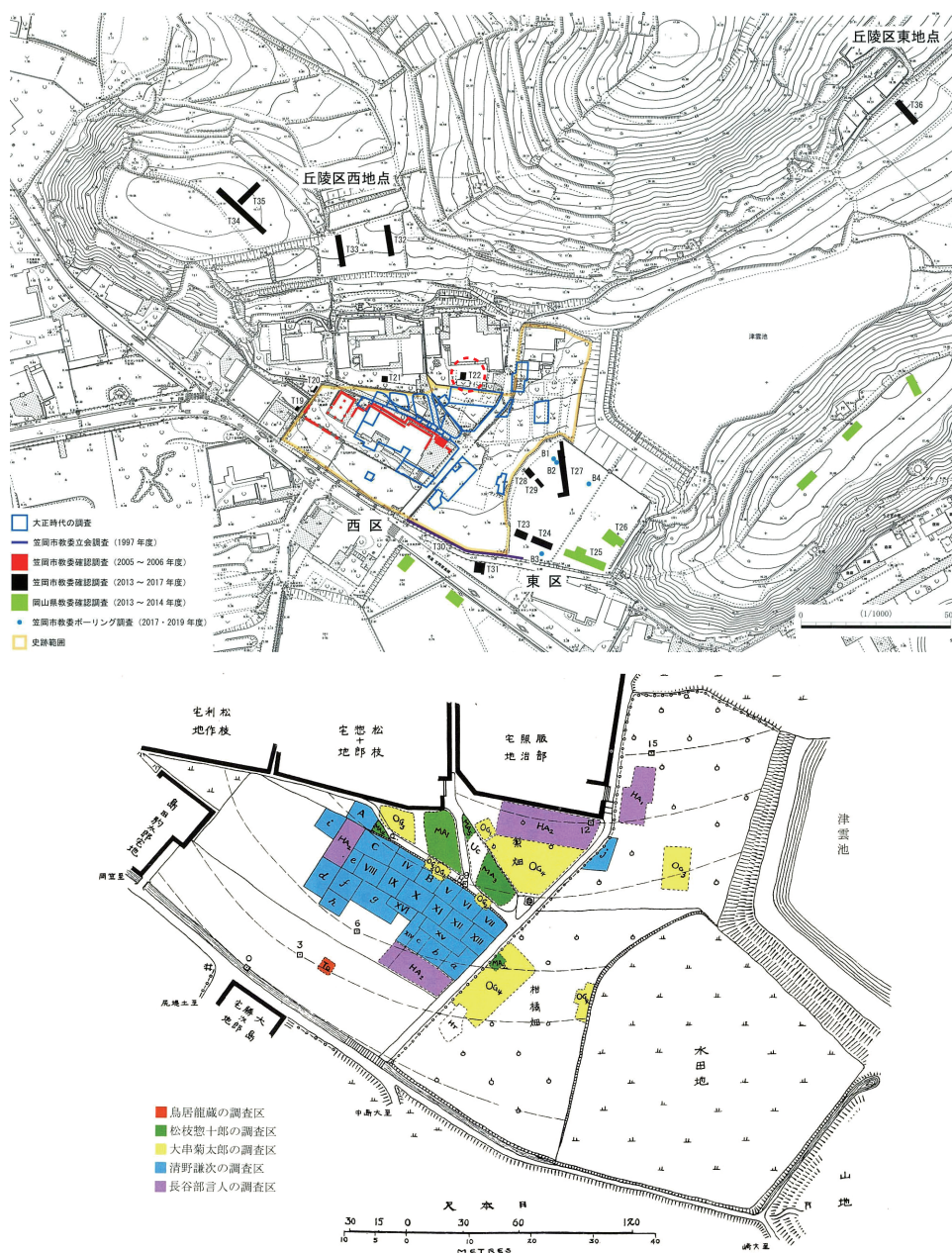


図32 津雲貝塚の全調査区位置図(上段)と大正時代の調査区(下段)
注(2) 文献第4図および第5図を縮小転載。赤丸破線は加筆。

時代資料の中にも同じような事態が生じている可能性については、心にとどめておく必要もあるのではなかろうか。縄文土器の鑑識眼を全く備えない私には不可能な作業であるが、派生する問題として、ひとつだけ指摘できるかと愚考しているところである。

〔注〕

- (1) 末永雅雄編『富民協会農業博物館本山考古室要録』1935年
- (2) 笠岡市教育委員会『津雲貝塚総合調査報告書』（笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告6）2020年
- (3) 例えば、関西大学なにわ大阪研究センター『なにわ大阪と本山彦一—大正期大阪への貢献と本山考古室—』2020年所収の諸論考などをはじめ、関西大学博物館博物館の概要ホームページ (<https://www.kansai-u.ac.jp/Museum/about.html>) にも詳しい。
- (4) 『総括報告』p.17 第3表
- (5) 例えば、井上主税・山下大輔「博物館研究班「本山コレクション貝塚研究班」研究成果報告（2023年度）」『関西大学博物館紀要』第30号，2024年などの一連がある。
- (6) 『要録』pp.222-223
- (7) 山口拓也「財団法人富民協会と農業博物館・本山考古室」（前掲注（2）文献所収）
- (8) 関西大学文学部編『関西大学考古学資料図鑑』1973年，図版第35およびp.27
- (9) 久永春男「Ⅱ弥生文化の発展と地域性 三東海」（和島誠一編『弥生時代』河出書房日本の考古学Ⅲ，1966年）
- (10) 島田貞彦・清野謙次・梅原末治「備中国浅口郡大島村津雲貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』1920年，pp.22-25，図版第24
- (11) 京都大学文学部『京都大学文学部博物館考古学資料目録 第一部 日本先史時代』1960年，pp.244-248
- (12) （財）愛知県埋蔵文化財センター『岡島遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第14集）1990年
- (13) 寺沢薫・森井貞雄「1 河内地域」寺沢薫・森岡秀人編著『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』1989年
- (14) 前掲注（12）文献及び（財）愛知県埋蔵文化財センター『岡島遺跡Ⅱ・不馬入遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第43集）1993年
- (15) 伊藤淳史「弥生時代における地方間交流—伊勢湾地方弥生土器の型式変化と移動—」『史林』77-4，1994年
- (16) 瓜生堂遺跡調査会『恩智遺跡』Ⅰ・本文編，1980年，Fig55-1